タランティルスの例外少年

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タランティルスの例外少年

【Ｎコード】
Ｎ７０４３Ｘ

【作者名】
アセット

【あらすじ】
センターハート家の従者でありながら、学園に通うロイ。彼は記憶がなく、落ちこぼれ扱いを受けながらもセンターハート家の護衛権の従者として学園生活を送っていた。
彼は持ち前の天賦の才を発揮し誰にも屈しない強さを求めた。守りたい人達の為に。

これは人間の「例外」の物語

プロローグ（前書き）

よろしくお願いします。

プロローグ

ある男がいた。それは捨て子で記憶喪失で不幸な少年だった。しかし、そんな少年にも僅かに幸せを見出せるものがあった。

それは強くなること。どんな不幸や理不尽をも弾きとばす圧倒的な力を手にすること。どんな蔑みや嘲笑をも吹きとばす絶対的強者になること。

これは不幸でも嗤われても落ちこぼれでも決して諦めずに最強を求めた少年の物語。

舞台は魔法と剣術とが生きていく為のステータスになるファンタジーの世界タランティルス。

彼はここで最強を目指すー

プロローグ（後書き）

頑張ります。

第一話（前書き）

プロローグが説明だった・・・

第一話

「今日も学園かぁ・・・」

そうぼやいているのは、ロイ・カーレス。

つまり俺である。俺の紹介をさせてもらうととある貴族のウチのタダ飯喰らいという肩書きしか無くそこが世知辛いところではある。

しかしそんな俺にも夢がある。それは強くなること。なぜ強くなりたいのか？

そんな疑問には簡単に答えられる。それは捨て子だった俺を拾ってくれた人達や大切な人に恩返しをするためだった。

「荷物持ち。なにぼやいてるの！！さっさと
学園いかないと遅刻するわよ！！」

そう怒鳴ってきたのは俺が厄介になっている貴族の家のお嬢様だった。名前はアメリア・
アイラス・センターハート。容姿端麗で優等生。黒髪の美少女である。この家に拾われなかったら、会うこともなかったであろう人種だと思う。

俺はアメリアに

「学園の準備でおくれました。それでは学園へ向かいましょう。」

「ええ。じゃあこの荷物お願い。私じゃ重くて。まあ、落ちこぼれには荷物持ちがお似合いね」

アメリアお嬢様は優等生だが落ちこぼれの俺には割と冷たい。まあ魔法と剣術の才能が俺にはまったくなかったから仕方ないかもしれない。

「はい。お持ちします。」

そういってアメリアお嬢様から登校鞄を受けとる。お嬢様は守りたい人なので、ムカついたりはしない。それに俺を拾ってくれた大恩人の娘様を無下にもできない。
だから俺は学園でも家でもお嬢様の従者となっている。

俺は記憶喪失でセンターハート現当主ラザイン様に拾われた以前の記憶がない。だからこの立場も甘んじて受け入れている。

「じゃ、早く行くわよ落ちこぼれ！」

「はい、お嬢様」

そういって俺達は学園に向かった。

第一話（後書き）

唐突すぎたかな？拙作ですが、応援おねがいします。

主な登場人物（前書き）

登場人物紹介です。随時更新していくつもりです。

主な登場人物

ロイ・カーレス
寡黙で冷徹に思えるが心は暖かい人物。幼少期にセンターハート家現当主ラザインに拾われた黒髪の少年。１５才の割には魔法や剣術を使いこなせていない落ちこぼれ。努力家である。よく見ると顔は整っている。ロイという名前は便宜上必要だから、自分でつけた。階級は平民。

アメリア・アイラス・センターハート
容姿端麗で優等生の美しい少女。ロイには厳しいが他の者には優しい。ロイに厳しいのはこの世界でのステータスである実力がないという理由だけ。平民だからといって差別する人格ではない。ロイの境遇は知っているので若干応援している？凛とした少女で基本的に優しい。１５才。階級は上流貴族。

ラザイン・アイラス・センターハート
人格者。徳のある人物。妻が亡くなって傷心中の時、心の傷を舐め合うようにロイを拾った。現在のセンターハート家の当主。魔法や剣術をかなり使いこなせる。しかし魔法や剣術をあくまで交渉の手段としてしか極力使おうとはしていない。ロイの修行をたまに手伝っている。平和主義者。４２才。階級は上流貴族。男。

レーナ・サンホープ・センターハート
故人。ラザインの妻。アメリアと似て黒髪の美女である。

リーゼ先生
男の優秀な先生。本名は生徒達にも教えていない。リーゼは偽名ではないらしいが・・・
ともかく自分をオープンにしない人。イケメン。かなりの実力者。

ケイル・ギュンター・リバイル
男。１５才。ロイを馬鹿にしている。正確には落ちこぼれ扱いをしている。実力はアメリアには及ばないが中々の実力を持っている。
中流貴族。

主な登場人物（後書き）

見ておいた方が物語がわかりやすいかもしれません。作者の文才が無い為に苦労をかけます。

第二話（前書き）

第二話です。会話文少なめかもしれないです。

第二話

ここはセントラル魔法学園。毎年優秀な人材が輩出される進学校である。なぜ俺がこの学園に通えているのかというと、お嬢様のおかげだ。詳しく説明させてもらうとアメリアお嬢様は貴族の中でも上流貴族である。上流貴族は一人だけ家から特別に従者を連れていくことができる。

これを「護衛権」という。

まあ、普通の護衛権で学園にきた従者たちは年配の人も多いし、実力が高い人も多い。ついでに説明させてもらうと普通の従者は学園には通えない。護衛権で来た従者たちは基本的に学園の外で貴族たちの要請があるまで待機している。

俺が学園生活を送れるのは実質ラザイン様のおかげだ。従者で平民な俺でも学園に通えるのは幸運なのだろう。クラスメイトからの待遇は厳しいが。

そんな事を思いながら、アメリア様と共に教室に入る。クラスは１－Ａである。

「おはよう。みんな。」

こう言ったのはアメリアお嬢様。

「おはよう。アメリアさん。」

クラスメイトから羨望の眼差しをうけながらあいさつに返答されている。

一方俺は・・・

「よう。魔力の知識も低いし剣術の心得も全然ない落ちこぼれの平民従者君」

無論、落ちこぼれとは俺の事だろう。

「はい。おはようございます。ケイル様」

まあ、護衛権の従者だから、当たり障りのない返答をしておく。

「うわ～。あれがアメリアさんの護衛権の従者だと思うと可哀想だよね」

「実力もないし、学もあまりないからな。なぜあんなのをなぜ護衛権の従者にしたのか・・・センターハート家の七不思議の一つだな」

いえ～い。俺、七不思議になっちゃったみたいだ。

ていうか、我ながら酷い言われようだな。お嬢様もこちらを睨んでいるように見えるし。まあこの世界はほぼ実力が全てだから、仕方ないかもしれないけどな。

しかし、楽しみだ。まだ、俺は落ちこぼれだがいつかこいつ等を追い抜いてやるっていう目標があるからな。

目標がある奴は強くなれるというのがおれの持論だ。おれが目指すのは圧倒的な力。やるからには、最強を目指そうと思う。自分を磨くことが今の俺の唯一の娯楽だし。

そう思っているなか、俺は一人静かに呟いた。

「絶対に強くなって・・・人並みの幸せを手にいれることとセンターハート家に恩返ししてみせる」

そういった後、１－Ａの教室のドアを教師を彷彿をさせる人が開けた。

第二話（後書き）

ある程度状況説明が終わったら、会話文を多めにしたいです。

第三話

「これからＳＨＲをはじめる。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

学級代表のお嬢様が先生の呼び掛けに答え、皆も

「「「礼。」」」

と答える。生真面目なクラスだなぁ～と俺は思っていた。
いや、この位普通か？

まあ、そんなことはいいか。

しかし、今思ったがリーゼ先生ってすごい若いな。あ、リーゼ先生

は担任のことだ。

あんな年で由緒正しいセントラルの先生になれるなんて凄いことだよな。

俺が成長したら、手合わせして貰おうかな。

「これで終わります。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

「「「礼。」

おっと、一人思案にふけっていたら、何時の間にかＳＨＲ終わってた。

一人、礼をする時起立しなかった俺は不要な注目を浴びていた。

「落ちこぼれが態度まで悪かったらお終いだな」

そうこぼすのは中流貴族のケイル。

「すみません。一人思案にふけっていました」

まあ、俺は当たり障りのない返答をした。

「ま、おまえの事なんてどうでもいいがな」

そういって嫌な笑みを浮かべながら教室を立ち去るケイル。

俺は内心イラっときました。しかし、まだ力がない。まあ、俺の努力次第であいつを見返せるかは変わってくるわけか。

ん？そういえばなんでケイルは教室から出ってたんだ？

「今日の日程はＳＨＲだけよ。荷物持ち。ということで、鞄をよろしく。」

とお嬢様から声が掛かる。

「わかりました。お供したほうがよろしいでしょうか。」

「あんたのお供？いらないわ。友達と帰るから。じゃあね、荷物持ち。」

とスタスタ教室を出ていった。なんか寂しい・・・

心に寒風が吹きすさぶ。

おれはネガティブなのかもしれないな。

入学間もないから授業らしい授業もないし俺も今日は帰るか。

セントラル魔法学園高等部で俺はやっていけるだろうかと落ちこぼれ扱いを受けている俺は不安に思った。

第四話

俺はセンターハート家の屋敷の中庭でいつものように俺の恩人ラザイン様に修行をつけてもらっていた。

「脇が甘いぞロイ君」

「くっ！」

そういってラザイン様の剣術受けている俺。

ラザイン様は普段は人格者だが修行となると厳しく教えてくれる。

それは俺にとって嬉しいことだった。俺からラザイン様に頼んだことだし、何より俺が強くなりたかったからだ。

「しかし、ラザイン様の剣術は凄いです。剣筋が見えませんでした。」

「まあ、手加減せずに打ち込んでいるから当然だよロイ君。」

「しかし、君は凄いね。剣術と魔法を全く知らない半年前から凄い勢いで成長しているよ。」

「何せ、私の全力の斬撃を感覚的にでも防げているのだから。魔法に関しても初級魔法ならかなり使えるし本当に凄いと思う。」

そう！そうなんです！俺は半年前から魔法と剣術を学び始めたばかり。

つまり、学園に入る僅か前に修行をはじめたばかりなんだ。

まあ俺はセントラルの中等部ましてや他の学園にも入っていないことが知られているから落ちこぼれとして見られているが、

ラザイン様曰く、俺には

「天賦の才があるよ。君には。もし君がアメリアや他の貴族の様に幼少期から英才教育をうけていたら、その実力は多分アメリアを抜いていたと思う。」

そんな事をいわれたら、やる気が出てこないわけがない。

どうやら、俺は潜在能力とやらが人より高いらしい。

「少しだけ希望も見えてきました。ラザイン様ありがとうございます。もう少し修行を続けてもらっても構いませんか？御多忙なのは

承知しています。けれど、お願いします！」

「私は構わないよ。ロイ君。」

「じゃあ次は魔法の修行だ。」

「はい！」

（・・・しかし、ロイ君は努力を惜しまない天才型か・・・これは教えている私も楽しみだ！）

ラザインは一人そう思っていた。

世界観説明（前書き）

セントラル魔法学園高等部の在学期間は3年を想定しています。物語中に自然に入らないと思うので、書いておきます。作者の文才が無いばかりに迷惑をかけます。

世界観説明

この物語の舞台はファンタジーの世界タランティルス。ここは様々な魔法に満ち溢れている世界。魔法の凶悪さの度合いつまりランクを挙げていくと、

初級魔法

中級魔法

上級魔法

最上級魔法

未開拓魔法

となる。

最上級魔法があるのにその上のランクの魔法があんの？って感じではあるが、これはタランティルスの住人が未だにその魔法の領域に踏み込めていないことから、未開拓魔法と畏怖を込めて言われている。

魔法のランクの見分け方は純粋に流れている魔力量の多さで分かる。

この世界の魔法は詠唱を必要としていない。しかし、その代わり払わねばいけない対価がある。

それは気力。つまり精神力。魔力も対価に含まれている。もちろんランクが高いほどその対価は大きい。

この世界の戦闘は魔力も重要だが、気力といわれるものも重要なようだ。

これらの配分が戦闘では重要なのだろう。

次にこの世界のステータスに大きく関わる概念、剣術についての説明をしようと思う。

剣術は純粋に力と体力を消費するだけのものと思われがちだが、高度なものとなると魔法を発動する時にも使った気力を消費することになる。

武器は剣や杖を両方持つものが多い。

この世界には、魔武器というものが存在している。これもまた剣や杖といった形状が多い。この魔武器は中等部の頃に魔武器契約の魔法で取得するものだから、主人公のロイだけ現在魔武器を持っていないことになる。

次は使い魔についての説明をしたいと思う。

使い魔は高等部で習う、いや、習うというより契約するものだ。契

約の時出てくる使い魔の実力は契約者の潜在能力に比例しているという。

使い魔の詳しいランクは決まっていない。
人間に深い繋がりを持つ使い魔だが、詳しい事はよくわかっていない。何れ使い魔と対話出来る人物が全てを解き明かしてくれるのかもしれない。

最後に軍とギルドについての説明。学園を卒業した後にはほとんどの人がこの二つのところに「就職」という形で入ることになる。

軍は国の自衛や戦争の為に備えている組織。
ギルドは国中の依頼や戦争の予備戦力としての役割を果たしている組織である。

世界観説明（後書き）

大まかな世界観説明はこれで終了。大体タランティルスの構想はこんな感じです。

第五話（前書き）

第五話です。どうぞ。

第五話

ラザイン様との修行の後の翌朝、アメリアお嬢様の荷物をお持ちしていつも通り学園へ向かった。

今日から授業が本格的に始まる様だ。半年間の努力のおかげで魔法と剣術の基礎知識ぐらいは覚えている。まあ、授業面においては心配は余りなかった。

ただ心配だったのは・・・

「そういえばあんた魔武器持ってなかったわよね？実技は大丈夫なの？」

そう。俺には自分の専用武器ともいえる魔武器がないのだ。普通は学園の中等部の頃に授業で手に入れるらしい。

「若干心配ではございます。お嬢様。しかし、リーゼ先生も私が魔武器を持っていない事を知っておられます。放課後にでもリーゼ先

生に魔武器契約がしたいと言って契約してきますよ。心配ありがとうございます」

「誰が荷物持ちの心配なんかしてるのよ。誰が。私はただセンターハートの関係者であるあなたの失態で家の家名に傷を付けられたくないだけよ。わかった？」

おおっ。冷たい。

「わかりました。お嬢様」

「わかればいいの」

と、いった会話をしながら学園向かう俺。しかし、今日はいい日だ。ん？何故かって？

お嬢様が俺と会話をしてくれてるからだよ！

お嬢様は普段はゴミを見るような目つきで俺を見ています。

今日は扱いがましな方だ。機嫌がいいのかな？まあ、俺にはあまり関係ないが。

そして授業1時間目。魔法理論の座学の時間。いきなり、俺はリーゼ先生に授業中質問された。

「ロイ君。魔法を行使するときに安定するのは杖と剣どちらかな？」

このくらいは解る。

「杖です。理由は剣でも魔法を行使することはできますが、杖と比べて、魔法の精度は落ちるからです」

ラザイン様との予習？いや復習？で学んだ知識だ。間違ってはいないはず。

「その通りです。だから、魔法主体で戦う事になるときは剣ではなく杖で戦うと良いでしょう。使い魔契約が終わったらすぐ模擬戦もありますので、この事は覚えておいて下さい」

と、リーゼ先生。

ていうか、模擬戦あんの？成績に入るよなぁきっと。魔武器をまだ触ってすらいない俺には不利な気がする。今日放課後、絶対に魔武器と契約して修行しなくちゃいけないな。

「では、次にアメリア君。魔法を行使するときの対価と言われているものは？二つ挙げてください。」

おっとまだ授業中か。

「はい。魔法を行使するときに使う対価とは気力と言われているものと魔力です。魔法のランクが高いほどその対価は大きくなります。気力とは精神力と言い換えてもいいと思います。」

と、完璧な答えを返すお嬢様。流石。従者としての心得ばかりを教えられた俺とは違うな。少し嫉妬しちまった。

「完璧、か流石はセンターハート家といったところですね」

と、リーゼ先生。

「さて、今日の新しい知識として魔法の詠唱について先生から説明したいと思います。」

「皆さんは、絵本の勇者の伝説というお話などを読んだ事はありますか？きっとあるでしょうね。一人の勇者が国を救う話です」

俺は読んだ事ないな・・・まあ、小さい頃は慣れない従者としての知識を覚えるのに必死だったからな。

「この物語で登場する勇者は魔法を唱える時に詠唱と呼ばれるものをしています。しかし、我々の世界の魔法は詠唱を必要としていません。魔法と慣れ親しんだあなた達は当然知っている筈です」

俺も知ってるな。この世界の魔法は魔法名を唱えるだけで行使できる。

ただ・・・

「しかし、その代わり絵本とは違い魔力だけでは魔法を行使することは出来ません。前述の通り気力と言われているものも消費しないといけません」

詠唱はないが、気力は消費するってことだな。まあ、新しく習う事といっても皆もこのくらいの知識は有るだろう。

「ここからが注意して聞いて欲しいところです。」

リーゼ先生が声を潜めた。

「詠唱がないからといって魔法を行使し過ぎると、気力が無くなり気絶します。最悪、死に至ります。魔法名をいうだけで簡単に魔法を行使できるので、注意してください。これが原因で学園で死者が出たこともあります。まあ、魔法名を覚えても顕現させるまでは修行が必要ですが。」

魔法の使い過ぎ＝死ｏｒ気絶ってことか。

俺も注意が必要だな。

「これで授業を終わります。学級代表！」

「起立。気をつけ。礼。」

あ、お嬢様は学級代表だったな。

まあ、とりあえず関係ないか。

みんなも礼をして次の授業に備えている。

まあ、今日は座学だけみたいだから、とりあえず乗り切れるだろう。

ああ～さっさと放課後になって魔武器と契約したいなぁ。

第五話（後書き）

世界観説明を飛ばした人も理解できる様に頑張りました。気といわれるものはこの世界の戦闘では重要になってきます。

第六話（前書き）

第六話、どうぞ。

第六話

放課後ー

「やっと授業がおわった・・・」

俺は一人そう呟いていた。

お嬢様には先に帰って貰った。というより、気づいたらお嬢様はもう帰っていた。まあ、今日の朝、放課後に魔武器との契約を先生に手伝ってもらうと言っておいた筈だから、それで帰ったのだと思う。

まあお嬢様からは俺は単なる荷物持ちの従者程度にしか認識されていないからな。

魔武器との契約が終わるまで待っていてくれたりはしないか。なんか虚しい。

閑話休題。

話が脱線していた。今はリーゼ先生に魔武器契約の仲立ちを頼んだ

ところだ。リーゼ先生の反応は、

「うん？魔武器契約をしていないのかい？確か魔武器って中等部の時に・・・ああ！君がセンターハートの護衛権の従者、噂のロイ君か！」

反応がうざい。リーゼ先生はもっと凛とした先生だと思っていたのに。

「わかった。君の事情は知っている。協力しよう。」

「ありがとうございます。」

いきなり先生の雰囲気が凛としたものに変わった。男の若いながらも威厳のある表情だ。
公私の使い方もわきまえている様だ。やはり素晴らしい先生だと思う。

特別準備室ー

「ここが特別準備室だよ。ロイ君。君にはここで魔武器と契約してもらう。覚悟はいいかい？まあ、覚悟なんてものは実はそんなに必要ない。それに特別な儀式や魔法を使う訳ではないしね。」

「そうなんですか？」

「そうだよ。ロイ君。魔武器との契約はそんなものなんだ。だからといって気を抜いてはいけないよ。一生支え合うものだからね。魔武器と人間は。使い魔並に重要なんだよ？わかったかい？」

わかりやすい説明だった。魔武器は重要。気は抜くなってことか。

「わかりました。では、先生、魔武器との契約方法を教えてくださいませんか？」

「わかった。今、教える。実は魔武器との契約には特別な儀式、魔法、道具は一切必要ないんだ。これはさっきも言った筈。重要なのは意思の力。思いの力。精神力。いわば、気力。つまり、魔武器契約で使うのは気力なんだ。」

気力かぁ。あんまり意識したことはないな。

「まだ説明を続けると、魔武器と契約するには念じるんだ。」

魔武器に関して、素人な俺はよくわからなかった。

「念じる？念じるとはどういうことですか？」

「わかりづらかったかな？念じるとは、ただ自分の心に働きかけるんだよ。魔武器よ・・・来い！ってね。簡単だろ？」

「確かにそれだけなら、簡単です。早速自分の心に働きかけてみます。」

「私はあくまで、仲立ちしかできない。まあ、危険もないし、全力を出してこい。」

「はい！では・・・いきます！」

その瞬間凄まじい量の光の奔流が特別準備室を覆っていた。

「くっ！マジック・ガード！」

リーゼは咄嗟に魔法を行使して自分の身を守っていた。

（なんだ・・・この気力量は・・・気力が具現化する程の気力量なんて・・・）

リーゼはそんなことを思い、光の奔流を見ていた。

光の奔流の中でー

「なんだ？この白い部屋は？」

いや、部屋というよりは・・・

「暖かい光の中みたいだな。」

ん？俺の見つめる先に一つの剣が光に突き刺さっていた。

「なんか神秘的ですらあるな。リーゼ先生もいないし。ここだけ世

の中と離されたみたいだ。」

まあ実際はそんなことなく、ただの比喩だけど。そう思いながら多分俺の魔武器であるその剣を握ってみた。

握った瞬間ー

「うっ！何だこれ！頭が！頭が焼ける様に熱い！」

俺の脳にこの魔武器の情報が流れてきていた。

「はぁ、はぁ、終わったか・・・」

間違いないこの剣は俺の魔武器だろう。全身全霊をかけてだしたこの剣が俺の生涯のパートナーとなるだろう。

この青白い光芒を放つ美しい刀身をもつ剣の名は気仙花（けせんか）

能力は気力を纏うことができ気力を纏ったら斬撃の威力が増加するようだ。さらに魔力とも相性が良く魔力も纏える様だ。

試しに光の奔流の中で魔力を込めてみる。さっき気力をかなり使ったから今度使うのは魔力だ。そうすると気仙花（けせんか）の刀身が青く輝き出した。

「良く切れそうな剣だなぁ・・・なんか感動」

自分が落ちこぼれじゃ無くなったみたいだ。まあ世間からみたら、今まで学園に通っていない俺なんて落ちこぼれなんだけどな。

そして、俺はこの魔武器、気仙花のとっておきの必殺技の能力を試そうと思う。

その能力の名は「不可視の斬撃」。

簡単に説明すると、遠隔攻撃能力ということになる。詳しく説明すると、気力や魔力が纏っている斬撃を飛ばすことができる能力だ。しかも能力の名の通りその斬撃は視えることはない。つまり、見えない遠隔攻撃能力がこの気仙花にはあるということだ。

てか、強くね？見えない衝撃波飛ばせるんだぜ？皆もこれと同じような魔武器もってんのかな？

「学園が怖いと心の底から思ったよ・・・」

まあ、最強を目指している俺だ。怖いと思うが気後れなんてしてられない。

とりあえず、この気仙花の能力「不可視の斬撃」を試すことにした。

「オラァ！」

と俺にあんまり似合わない気合いの声を出して回復してきた気力を気仙花に込めてその斬撃を横に薙いだー

特別準備室ー

（ロイ君遅いな・・・あの光の中で何が起こっているんだろうか？）

一人リーゼは思っていた。

ん？なんか光の奔流がモーゼの様に真ん中から裂けてくな。

その瞬間ブォォォンという音ともに特別準備室の壁が壊れた。

あれ？特別準備室の壁の一部が壊れたの・・・か？

光の先には剣を握っているロイが立っていた。マジック・ガードを解きロイに近づくリーゼ。

「その様子だと魔武器とは契約できたみたいだな。」

と、轟音に驚きながらも言うリーゼ。

「契約したのかはわかりませんが・・・魔武器を手にすることはできたと思います。」

「なら良かった。」

しかし、ロイは思う。光の奔流ごと特別準備室の壁を壊した「不可視の斬撃」。とても恐ろしい能力だなと。

（いつも平静なリーゼ先生も少なからず驚いているみたいだな。ていうか、壁の修理代とかヤバイ。俺じゃ払えない。もしかしたらまたセンターハート家に迷惑が・・・そしてお嬢様から突き放した様な目で見られるのか・・・最悪な負のループだな）

ロイは結構真面目な事を考えていた。
一方、リーゼはこんなことを思っていた。

（やっぱりただの魔武器じゃないみたいだな。頑丈な特別準備室の壁を破壊する威力の攻撃を産む美しい刀身の剣か・・・ロイには落ちこぼれという認識しかなかったが、ロイは一体何者だ？あの気力量は学生が出せるものじゃないぞ。調査が必要・・・か？）

「そういえば、先生。魔武器をしまうのにはどうすればいいのですか？」

「あ・・・ああ・・・魔武器をしまうには魔武器よ消えろ！と念じるだけでいいぞ。」

「わかりました。」

魔武器よ消えろと念じて俺は気仙花を消した。

「あと一つ聞きたいのですが、壁の修理代は・・・？」

不安そうなロイ。

「学園長に報告するが、センターハート家に迷惑がかかる事は無いと思うぞ。もちろんお前が修理代を払う事も無い。この学園は授業中に起きた事故で学園の物品が壊された場合生徒に弁償はさせず、学園が負担することになってるからな。」

「でも、先生今は授業中じゃな・・・」

「授業中ってことにしとくよ。」

と、俺の言葉を遮りニッと笑いながら言うリーゼ先生。
本当に素晴らしい先生だ。

「ありがとうございます。俺はこれで帰らせていただきます。」

「わかった。明日は使い魔召喚ってことを忘れずにな。」

「はい。わかりました。」

リーゼ先生に背を向け屋敷に帰る俺。少し自分の力というより魔武器のおかげだが力が上がった気がして喜んだロイだった。

第六話（後書き）

魔武器契約の話でした。どうでした？リーゼ先生は様子見って感じです。

第七話（前書き）

主人公は既に気力だけだったら、化け物レベルです。

第七話

俺は学園から帰ってきていつもの様に従者としての業務を果たした後、夜の修行をしていた。ラザイン様がセントラルの街に出掛けていて、いないので必然的に俺一人で屋敷の中庭で修行をしている。

今日は魔武器に慣れるための修行しかしていない。そのおかげで気仙花を自分の手足のように振るえるようになった。

魔力の青き光芒と気力の白き光芒が中庭を走る。その風景は幻想的ですらあっただろう。
その修行を見ていたアメリアが思わず、従者の少年に声をかけてしまった。

多分、ラザインが街に出掛けていることもあったからだろう。アメリアはともかくロイに声をかけた。

「ずいぶん長続きしますわね。その修行」

「!? お嬢様?」

「なんですの荷物持ち? その驚き様は」

「いえ、少し驚いてしまって。お嬢様が俺に声をかけてくれるなんて。何か従者としての不手際でもありましたか？」

「そんなものはないですわ。ですが、少しその武器に興味があって。それはあんたの魔武器？」

「はい。そうです。俺の魔武器です。銘は気仙花といいます」

「気・・仙花・・・」

「良かったら、触ってみます？」

その瞬間嬉しそうな顔をしたアメリアがいた。

「良いんですの！？」

「はい。お嬢様の頼みですから」

「別に頼んでなんていません。なんか荷物持ちの癖に生意気ね」

「すみません。お気に障ったのなら謝罪します。それよりお嬢様。気仙花をお渡しします」

といって気仙花を渡す俺。

「美しい刀身の剣ですわね。ですがさっきまで光っていませんでした？」

「それは、俺が魔力と気力を込めて剣を振るっていたからです」

「お、落ちこぼれのあんたが・・・魔力と気力付加の魔武器を！？嘘ですわ・・・私でも魔力付加の剣しか出せないのに・・・」

「嘘はついていません。お嬢様」

お嬢様に嘘つきと思われたくはないな。こんなところで、不信感を持たれたくはない。実際に剣を振って見せるか？

「ならもう一回その気仙花とやらの剣舞を見せなさい」

いや、剣を振るのはいい。今、俺もそう切り出そうとしてたからな。だが、お嬢様の言葉の剣舞をもう一回見せなさいって俺は一度でもお嬢様に剣舞を見せたことがあったか？

「もう一回とはどういうことですか？お嬢様に剣を振る姿を見せるのは初めての筈ですが？」

少し失礼かもしれないが聞いてしまった。

その瞬間アメリアの顔が林檎の様に赤く染まり

「別にあんたの修行姿が気になって話しかけたわけじゃないんですからね！？」

と言われた。

「わ・・・わかりました」

妙な迫力に押されタジタジになるロイこと俺。

「じゃ早速剣舞を見せてもらいましょうか」

と、アメリア。

「わかりました」

まあ、断わる理由もないし、見せますか。大事なお嬢様の頼みだし。

「では振るいますよ。お嬢様・・・いくぞ！気仙花！」

その呼びかけに応えるように気仙花は青白い光芒を浮かべながら美しくその刀身を揺らしいた。

「綺麗。・・・」

アメリアはロイが剣舞をやめるまでその幻想的な光景を見続けていた。

「ふぅ。これで信じていただけましたか？お嬢様？」

「フン。落ちこぼれの荷物持ちのロイにしてはまあまあの魔武器ね。まあ頑張れば？」

そう言ってアメリアは中庭を立ち去った。

ロイは初めてアメリアに名前で呼ばれたことに歓喜に打ち震えていた。

俺は守りたい人と少し心の距離が近づいた気がして、中庭を立ち去った。

一方、センターハート家アメリアの自室ー

アメリアは自室のベットで横になっていた。
そして一人の荷物持ちの少年を思い浮かべていた。

（あの荷物持ち・・・私クラスの魔武器を使っていた？私は学年トップクラスの実力はあると自負している。でも何だかあの荷物持ちの魔武器と私の魔武器じゃ荷物持ちの魔武器の方が美しく強いと感じてしまった。）

「はぁ。なんで私あんな奴と会話したんだろう？」

ここ数年間荷物持ちとは従者としての会話しかしてこなかった。いやあの荷物持ちが拾われてからまともに喋ったことはない。

（あの美しい刀身に惹かれたのかしら？あの荷物持ちは落ちこぼれだけど剣舞は美しかった。まるで幻想空間にいるみたいな美しさ。まぁ魔武器が凄いだけね。きっと。）

アメリア自身は自覚していないが、アメリアはロイに少なからず興味を持ち始めていた。

第七話（後書き）

気仙花はかなり強い魔武器にしておきました。

第八話（前書き）

使い魔との契約の説明回です。お気に召さなかったらごめんなさい。

第八話

はぁ朝か・・・

俺は昨日、お嬢様と初めてまともに喋れた気がして少しテンションが上がっている。

早起きしてしまった。

まあテンションが上がっているといっても、落ちこぼれ扱いを受けている学園に進んで行きたいとは思わないが。

学園の制服も着たし、こちらの準備は終わった。後はお嬢様を待つばかり。

少し、待っているとお嬢様の部屋のドアが開くのが見えた。どうやら、お嬢様の準備も済んだ様だ。そう思っていたら早速お嬢様から声が掛かった。

「学園に行くわよ。荷物持ち。はい、鞄」

「はい。受け取りました。行きましょうか」

「ええ、そうね」

今日は俺に対するお嬢様の物腰が柔らかい気がしないでもない。従者時代の俺はお嬢様と会話する機会もなかったから、お嬢様の事はあまり理解していないかもしれない。しかしそれを考慮してもいつもよりかなり良い感じだ。

昨日の魔武器が原因か？あんなのだったら、いくらでも見せてやりたいね。まあお嬢様には魔武器受けが良いらしい。嬉しい情報だ。折角、護衛権の従者になったのだから公私共にお支えしたいからな。

「なに突っ立ってんの！早く学園に行くわよ！あんたが来なきゃ私の荷物もないじゃない」

「すみません。少し考えごとをしていて・・・」

「そんなことといいから、早く学園に行くわよ。なんたって今日は使い魔との契約の日だからね」

「はい。行きましょう」

今日は使い魔召喚の日かぁ。一日掛けてグラウンドで行われるんだよな。魔武器と同様に一生を過ごす相棒だ。今日は使い魔召喚を全力で頑張るか。

俺たちは学園に着いた。すると教室の黒板に太字でグラウンドに来るようにと書いてあった。

まあ向かうとするか。

グラウンドー

ここがセントラル魔法学園のグラウンドか。あまり見た事はなかったが、広いな。まあこの広さなら1学年全員の使い魔召喚なんて余裕で出来るな。

「1ーAはここだ！早く来い！」

と、リーゼ先生。

俺は急ぎ足で向かう。何故か俺とほぼ同時に学園に来た筈のお嬢様が既にグラウンドにいることに疑問を覚えたが、まあ些細なことだ。

「では、出席番号1番から使い魔との契約を始まる。使い魔との契約の魔法は先生達が行使するから安心してくれ」

どうやら、使い魔との契約が本格的に始まるな。使い魔は己の潜在能力に見合ったものが出てくるらしい。

もっといえば使い魔は自分の「将来」の可能性といっても過言ではないのだ。

嫌でも気合いが入る。といっても、俺が使い魔との契約の魔法を行使するわけではないので、なんか気合いが入りづらいが。

まあ全力で使い魔との契約に挑もう。それが、今、俺に出来る唯一のことだ。

第八話（後書き）

ロイ（主人公であり従者）の使い魔はもう決まっています。潜在能力の具現化とか書いてしまったのでかなり強くなるかもです・・・

第九話（前書き）

ロイの使い魔がまだでてこない・・・だと・・・

第九話

まずは出席番号1番つまりはアメリアお嬢様からの使い魔契約だ。
何が出てくるか楽しみだ。

「アメリア君。使い魔契約を始めるがいいかい？」

リーゼ先生が問う。

「はい。始めてください」

お嬢様も心構えは出来ているようだ。

「ではいくぞ。サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使すると魔方陣が現れた。

「アメリア君。現れた魔方陣に手をかざしなさい」

「わかっています。魔方陣に手をかざせば自分に見合った使い魔が顕現するんでしたよね？」

「流石だなアメリア君。その通りだ。私が説明を言う手間が省けたな」

流石お嬢様。使い魔契約は高等部の知識なのに、予習されていらっしゃるようだ。

「ではいきますわ」

そういって魔方陣に手をかざすお嬢様。魔方陣からでてきたのは・・・

「グォォ」

炎龍だった。炎のドラゴン。かなり大きい。凄い強そうだ。

「「「「うぉぉ！凄いアメリアさん！こんな大きい使い魔と契約できるなんて！」」」」

みんながお嬢様を褒め称える。

まあ、使い魔のランクは詳しく決まってはいないんだが、炎龍はと

ても凄い使い魔の部類に入るんだろう。流石はお嬢様。

俺はお嬢様を盲信している。何か悪いか？

閑話休題させてもらおう。

午後になった。みんなが次々と使い魔との契約を終わらしている。ていうか、お嬢様の炎龍の時も思ったんだが、契約の時に我に力を示せ的なイベントはないんだな。つまり、使い魔に力を認めさせるイベント。そんなものがないから意外と使い魔契約はスムーズに進む。

まあ午前中にケイルが風龍を出してどや顔でこっちを見下していたのはかなり印象的だったな。まだ俺の使い魔も見ていないのに。

まあ、ケイルの使い魔がドラゴン関係なのも意外だったが。ということは、ケイルもかなり強い部類に入るのか。

意外や意外。俺は今まで、ケイルをただの糞貴族だと思っていた。実力はあったみたいだ。

一時期はウザすぎて敬語をやめようかと思っていたくらいだった。何故敬語を使うのかって？おいおい、忘れたのか？俺はあくまでお

嬢様の従者なだけだから、貴族様達には敬語を使う必要があるんだぜ？

俺は誰に説明しているんだろうか？最近自分がよくわからない。

そんなことを思っていたら、何時の間にか俺の使い魔契約の順番がきたらしい。俺は名前がロイだからかなり順番が遅い筈なんだけどな。

時が経つのは早い。

「おーい。出席番号３４番。早く来い」

俺はリーゼ先生の元に向かう。

「ではサモン・リンクを行うぞ？ロイ君？」

「はい。お願いします」

「準備は出来ているようだな。では、サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使して魔方陣を顕現させる。俺は迷うこと無く、その魔方陣に手をかざす。

ロイが手をかざした瞬間一つの禍々しい扉が魔方陣からロイの前に姿を現した。

第九話（後書き）

使い魔契約を引っ張りました。すみません。ストックの通りに出して行くと、無理やりなタイミングで終わるんですね。本当に申し訳ないです。

第十話（前書き）

使い魔登場です。

第十話

「何だこれは？」

俺は思わずそう呟いた。使い魔は確か生き物の形を形どっている筈だ。先生の魔法が失敗したわけでもないだろうし、一体目の前の現象は何なのだろう？

ただ、禍々しい扉が目の前に立っている。やっぱりよく分からない。でもなんだかあの扉の先から俺を呼んでいる声が聞こえる気がする。幻聴だろうか？錯覚だろうか？俺の心に直接語りかけてくるような感じ。まあよくわかんないが。

よく分からんが、俺は決心した。俺は先生に声をかける。

「リーゼ先生。俺はあの扉の先へ行きます」

「ああ・・・わかった・・・」

どうやらリーゼ先生や他の生徒たちは呆然としてまともにリアクションが出来ないらしい。お嬢様ですら目を丸くしている。まあ、使い魔契約で変な扉が出

てくるなんて今までの生徒たちには居なかったしきっと珍しい事何だろう。いやリーゼ先生も驚いていたからもしかしたら俺が初めて扉を出したのかな？

前代未聞ってやつか？

落ちこぼれの特権みたいな感じだな。嫌な特権だが。

そして、俺は禍々しい扉を開けた。

扉の先ー

俺は扉の中に入った。一面真っ黒な空間。こんなところに俺の使い魔がいるのだろうか？

「いるぞ。儂はここじゃ」

声の方を見ると、其処には金髪の美しい聖女とでも表現出来そうな女が立っていた。

「お前が俺の使い魔になってくれるのか？」

「うむ。なってやるぞ。だがその前に、お主と話す必要があったからお主を儂の精神世界に逆召喚させてもらったのじゃ」

「話す必要があった？なら直接こっちにきて話せばよかったんじゃないのか？」

「残念ながらお主の今の魔力では儂を顕現させることはもって数十秒じゃ。なんせ儂は使い魔の中でも「例外」の存在じゃからの」

「そうなのか？だから逆召喚？をしたのか。まあ、それには納得した。そういえば、お前の名前も聞いていなかったな。ていうか、人型の使い魔なんて聞いたことないな」

「うむ。それでは、話したい事の前に儂の自己紹介からいこうかの？儂の名はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイじゃ。人型なのは儂が使い魔の中でも「例外」だからじゃの」

「例外？人型ってことがか？まあ名前にも突っ込みたいがな」

「名前はしょうがなかろう。生まれ持ったものじゃからの。まあお主の例外についての質問の答えは人型というのもそうじゃし、魔力量というのもそうじゃろう」

「どういうことだ？」

「つまり、儂は他の使い魔と一線を画す使い魔ということじゃ。まあかなり強い魔力と気力と力がある使い魔と思ってもらって構わんぞ。えっへん」

えっへんって可愛いな。オイ。金髪の美しい美女に言われているから変な感じだ。まあ強い使い魔なのか？

「可愛いくて強いだなんて、褒めてくれるのか主様よ？嬉しい奴じゃ」

ん？口にしたつもりはなかったんだが・・・

喋っていたのか？俺。

「お主も人を褒めるなら口で言えば、いいものを・・・。安心せい。お主は喋ってはおらんぞ。ただ儂と主様の精神が繋がって主様の心が儂にだだ漏れなだけじゃ」

「マジで？」

「マジもマジ。大マジじゃの」

マジかよ・・・心読まれるとか拷問じゃね？
しかも意思があり喋れる使い魔に。さっきまでの強い使い魔としてのオプションがどうでもよく感じるほどの事に俺は愕然としていた。

「なんじゃ。どうでもいいとは。儂はかなり強いんじゃぞ。まあその儂を呼び出す事に成功したお前様もなかなかなものだと思うぞ」

「そうなのか？よくわからないが、そうだといいな。俺は強くなりたいからな。サタンが強い使い魔なら嬉しいし、頼りになるよ」

「主様は嬉しいことをピンポイントに突いて来るのぉ。初めて名前呼びしてくれて嬉しいしの。儂は主がとても気に入ったぞ」

女性？からの初めての好意だな。落ちこぼれだから学園では誰も話しかけてくれなかったし。

「ん？待て。主様は歴戦の英雄かなんかじゃないのかの？学園の落ちこぼれ？主様が落ちこぼれだったら多分他の生徒達はゴミじゃの。ゴミ。儂が召喚されたのも久し振りだしそこまで力をもつ人間もおらんはずじゃしの。」

「ん？その歴戦の英雄ってのはどういう根拠からきたんだ？」

「うむ。ここから先は儂の話したいことと内容が被るじゃろ。先に話したいことの本題から話してもよいかの？」

「全然構わないぞ」

「もう。主様ったら本当に優しいのぅ」

なんだか俺、この使い魔にえらく気に入られてないか？

「さっきも言ったじゃろ。主様を気に入ったと。久し振りにしゃべれた相手じゃしの。儂が召喚されるなんて中々ないしの。久し振りに孤独とおさらばできるのだから、呼び出してくれた人を気に入るに決まっておろう」

「ついでにサタンは何年間孤独だったんだ？」

「ざっと千年位だと思うぞ？主様よ」

お前は千年もの間使い魔として誰の事を待っていたのか・・・

「お前は寂しくなかったのか？この暗闇の中にただ千年もいて」

「寂しいにきまって・・・寂しいに決まっておろう。誰もいない空間に一人でいるのはとても辛かった。主様がこなかったら、狂っていたかもしれんの。もし主様が来んかったら儂は・・・儂は・・・」

数千年の孤独を思い出していたのかサタンは泣いていた。俺は思わずサタンを抱きしめていた。

「サタン。大丈夫だ。俺はここにいる。これからは俺がお前の主だ。だから。もう泣く必要は無いんだよサタン。俺はお前を孤独からも守れるように強くなるから。だから・・・だから・・・大丈夫だから」

「儂はもう孤独・・・じゃない？」

「ああ。孤独じゃない。これからは俺と共にいてくれ。お前が俺の使い魔だ」

「うん・・・うん。ありがとのぉ。主様よ。思わず感極まって泣いてしまった・・・の。主様が良かったらもう少しこのまま抱きしめていてはくれんかの？主様の温もりは何だか安心するからの」

「サタンが嫌じゃ無ければいくらでも抱きしめていてくれてもかま

わない」

そうして落ちこぼれの生徒と孤独だった使い魔は互いの傷を舐め合う様にしばらく抱き合っていた。

「うむ。あ、ありがとうの。主様よ。慰めてくれて。とっても嬉しかったぞ」

「ああ。あんな月並みな言葉でもサタンの心に届いたなら嬉しいよ」

「ぬ、主はあれじゃな。本当に儂にとってピンポイントに言って欲しい言葉をかけてくれるの」

「そ、そうか。まあ仲良く出来そうで良かったよ。サタンとはこれから心まで見透かされてしまう仲だしな。これからもよろしくな。サタン」

「うむ。こちらこそよろしく頼むぞ。私の主様よ」

俺たちはお互い少し照れながらも絆を深めた。

「で、主様には話したいことがあるのじゃ。儂が主様のことでとても気になったことをな」

さっきまでとは違い凛として高圧的にもどったサタン。

「ああ、さっきの俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「そうじゃ。そのことで主様に質問がある。伝えたいこともあるの」

「わかった。質問してくれ」

俺はサタンの質問に身構えた。

第十話（後書き）

使い魔は戦闘でも重要になってきます。使い魔が気に入らなかったら申し訳ないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7043x/

タランティルスの例外少年

2011年10月20日23時34分発行